

# 考古かながわ 第8号

1995年3月31日

## 第18回神奈川県遺跡調査・研究発表会開催される

1994年9月25日(日)横浜市開港記念会館講堂にて、第18回の神奈川県遺跡調査・研究発表会が開催されました。当日は300名近い参加者があり、広い講堂がほぼ一杯になる盛況でした。以下その概要について紹介しておきます。

日野一郎会長の開会のあいさつに始まって、午前の部の1番は大和市月見野遺跡群上野遺跡第5・6地点を滝澤亮、小池聡氏が発表しました。今回の発表は月見野遺跡群の中でも、上野遺跡に隣接する遺跡で、L1H層上部ないし上面から槍先形尖頭器が豊富なブロックと石器が検出され、注目されました。今後上野遺跡との接合関係資料や同一個体資料の存否の検討が必要になるでしょう。2番目の第1東海自動車道No.14(三ノ宮・下谷戸)遺跡は、宍戸信悟、立川直之、松田光太郎、三瓶裕司氏等によって発表されました。興味深いのは土器を持たない細石器石器群の上層から多量の縄文時代草創期の有舌尖頭器およびその製作過程がわかる剥片、破片が出土した点にあります。3番目として南足柄市塚田遺跡を安藤文一氏が発表しました。この発表は縄文時代中期から後期の敷石住居跡が検出され、石棒を製作した多量の剥片が検出されました。恐らくこの地で石棒を製作し、祭の道具として他遺跡に搬出されたものでしょう。

4番目の平塚市原口遺跡は長谷川厚、長岡文紀氏によって発表されました。この遺跡は弥生時代の方形周溝墓が100基近くが発見され、相模川以西としては初めての知見でした。今後この周溝墓と居住地との解明が待たれるところです。5番目は横須賀市大塚古墳群の調査について玉口時雄、大坪宣雄、北爪一行氏によって発表されました。この古墳は前方後円墳3基、円墳3基で構成され、県下でも数少ない古墳として保存要望されていました。6番目は横浜市大場横穴墓群F・G・H横穴墓群は大川清、吉田好孝、渡辺務氏によって発表されました。3群17基の古墳を調査した。その結果、豊富な出土遺物は勿論のこと、横穴墓の構築特に墓道に関する新しい知見がもたらされ、併せて横穴墓の新旧関係が把握されました。

午後からは都留文科大学の上杉陽氏による『南関東テフラから見た天変地異期』の講演が1時間程行なわれました。先ず3,400~2,800年前の天変地異をあげた。この時期は海面が下がり寒冷湿潤化、砂丘地帯の泥炭化、入り江、溺れ谷、湖沼、潟湖は急激な干上がり、世界的に寒冷化、乾燥したと言う。ちょうど縄文時代終末から弥生時代の移行期に相当するとのこと。また14,000~11,000年前のソフトローム層の時



記念講演

期に、大規模な地震や火山活動が活発になってきました。ちょうど温暖化によって海面が上昇した時期で、旧石器文化から縄文文化へ移行する段階に相当します。上杉氏は主として寒冷化と温暖化という二つの事例を世界的な実例をも加えてあげ、環境変化即ち急激な気候変化、海水準変動、火山活動、地殻変動の同時多発が当時の社会生活にマイナス要因となるかプラス要因になるかその地域のひとびとの動向を考える必要性を考古学研究者に投げかけました。

午後の発表は7番目として川崎市下麻生古墳群を北原實徳氏が発表した。2基の円墳は径10～13mで、周溝がめぐっていました。主体部は泥岩を利用した横穴式石室で構築されていまし

た。8番目は海老名市国分尼寺北方遺跡を伊東秀吉、大坪宣雄、荻上由美子、小林克利氏が発表しました。注目されるのは『法華寺』の墨書土器が掘立柱建物跡から検出され、報告者は国分尼寺との関連を推定しました。9番目は茅ヶ崎市居村B・前ノ田遺跡は富永富士雄氏によって発表が行われました。その結果、居村B遺跡は生産址的な低湿地遺跡で前ノ田遺跡は方向性に規則性をもった古代集落と推定しました。10番目は鎌倉市若宮大路周辺遺跡を田代郁夫、原廣志、佐藤仁彦氏によって発表されました。13世紀頃方形竪穴の木組みから石組みの転換が倉庫の役割を果たしたものと推定しました。11番目は小田原市本町小田原城三の丸堀の調査と題して戸田哲也、小林義典氏が発表した。三の丸堀西側法面は3段の石垣積みを確認した報告で、全ての発表が終了しました。

開港記念会館を後にして、中華街で50名以上の会員が懇親会に参加して、昼間の発表におとらず、ほろ酔かげんで考古学論争が行われ、楽しい一時を過ごしました。（白石浩之）

## 考古学講座

—『かながわの古代集落について』を終えて—

大上周三

去る3月5日、横浜市開港記念会館において、200名を超える参加者を得て『かながわの古代集落について』と題する講座が下記の内容で開催されました。

講演 「東国の古代集落」 講師 文化庁  
記念物課 松村恵司

事例報告 秦野市草山遺跡 (財)かながわ考古

学財団 大上周三

平塚市向原遺跡 (財)かながわ考古

学財団 中田 英

相模原市田名塩田原地区遺跡群 盤

古堂 滝澤 亮

多摩丘陵東端部の古代集落 横浜市

ふるさと歴史財団 鈴木重信

藤沢市南鍛冶山遺跡 藤沢市教育委

員会 加藤信夫

海老名市本郷遺跡 海老名市本郷遺

跡調査団 大坪宣雄

綾瀬市宮久保遺跡 神奈川県立博物館  
国平健三  
相模国府域の集落 平塚市教育委員会  
明石 新

#### ミニ討論会

神奈川県下ではこれまで多くの古代集落が調査され、その様相はかなり明らかになってきました。その一つとして掘立柱建物の普遍性をあげることができます。東国では異例で、まさに神奈川の古代集落の一端を彩る存在といえます。こうした点はいくまでも特色であって、特質を語るものではありません。



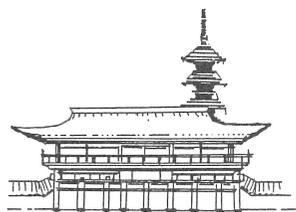
ミニ討論会

今回、古代集落の特質に多少なりとも迫りたいと思い、地域性・歴史性を考慮して8集落を報告すると共に討論会を行いました。その結果、いくつかの論点が明らかになりました。①7世紀中頃から8世紀前半にかけて成立し、10～11世紀段階に消滅する集落が多く、消長にある種の傾向が伺える。②掘立柱建物は初期段階からみられ、存続期間を通じて一般的な存在で、竪穴住居と併存している。③しかしながら集落によって掘立柱建物に多少がある。とりわけ、国府集落域ではなぜか少ない。④国府域集落、本郷・南鍛冶山遺跡など2、3の集落で墨書土器が集中的に出土している。墨書土器をもてる集落ともてない集落の違いは、⑤産屋の可能性の

ある竪穴住居や、仏堂と思われる掘立柱建物など居住用以外の建物の存在が浮かび上がってきた。この他、報告の折に触れられたものとして、⑥数遺跡で一町四方の居住域の存在。⑦竪穴住居と掘立柱建物からなる数種類の住まい構成、それとその機能について。⑧住まいの構成の格差は階層性を示す場合がある。⑨園宅地の有無について、等が報告されました。

また講師の松村先生は、ともすればやり過ぎされがちであった人々の精神行為の復元を、真っ正面から取り組む必要性を具体的に示し、喚起されました。

古代集落に関心をもつ同好諸氏が集まり、こうした情報・意見交換の機会をもったのは初めてです。当初の目的であった神奈川の古代集落の特質を解き明かすことは必ずしも出来ませんが、②、⑤、⑦のように共通理解を得たもの、或いは議論を尽くすべき問題点を共有し得た点で、3月5日は意義深い一日でした。



★本学会会員数は3月23日現在486名です。会のさまざまな活動はすべて会員の皆様の会費によって進められています。郵便振替、あるいは6月4日の総会時に直接納入をよろしくお願いたします。尚、鎌倉市の長瀬雅子さん、川崎市の井山順子さん、市川和代さんの転居先が不明です。ご存知の方は事務居までご一報下さい。

★会員名簿作成の準備を進めています。住所、氏名のほか電話番号の記載も考えておりますので、お差しつかえのない方はお知らせ下さい。

《事務局》

## 石垣山一夜城出土の瓦—最近の研究動向— 塚田順正

石垣山一夜城は、天正18年(1590)、豊臣秀吉が22万人の大軍を率いて小田原城の後北条氏を攻めた時に、全軍の指揮をとった城である。

後の軍記物などで一夜で城を造ったとされたところから、「一夜城」と言われるようになったが、実際に築城に要した日数は、秀吉が湯本の早雲寺を仮の陣所とした4月初旬から起算し、6月末には主要な作事が完成したとされている。

7月6日に小田原城は開城し、ほどなく城としての実質的な役割を終えたと考えられている。しかし、城の全域に見事な石垣が用いられていることや、瓦葺きの天守閣の他にも多くの建物が建てられていたことが知られ、天下人の政庁としての役割をもった本格的な城であったことも明かとなっている。(1)

さて一夜城からはこれまでも瓦が採集されることは良く知られていた。平成2年(1990)に、天守台の崩壊した石垣周辺から、測量調査にともなって2,400点余りの瓦片が採集された。

これらの瓦は天守閣に使われた一括の資料として数量的にまとまっていることや、その存続年代が天正18.19年というごく限られた時期に限定できる資料であることから、織豊期の城郭瓦の編年や系統を考える上で大変重要な資料といえるものである。

採集された軒丸瓦の文様は全て左巻き巴文と珠文が15個という組み合わせであることや、製作過程におけるコビキ(直方体に積み上げた粘土から瓦の大きさに応じた粘土板を切り取る)の手法が全て天正期に盛行するコビキA(凹面に無数の糸切状の痕跡が認められる)(2)であることが知られる(3)。

この数年、近畿・東海地方の織豊期城郭瓦の

研究が進展し、瓦当部の文様から工人集団の動きがある程度読めるようになってきた。

石垣山で発見された瓦の中で図中5は静岡県駿府城(天正18年中村氏時代)の瓦と、6、7が静岡県の浜松城と横須賀城とそれぞれ同一の型紙等から作られた同型瓦と考えられている。

こうした事実に対して対称的な二つの説が近年提出されている。土山公人は天正年間に徳川家康支配下の静岡の工人が天正18年に石垣山の普請に加わったとする説。(4)

加藤理文はこれらの城は小田原戦役後に徳川家康の関東移封に伴って東海道沿いに配置された豊臣系城郭であることに注目し、これら瓦の文様や製作技法の系統を辿ると大坂城秀吉の系統の瓦工人集団であったことが確認できるとして、石垣山に豊臣系の大名の工人が参画し、それらの工人がその後東海道沿に展開する豊臣系城郭の普請に関わったと説明する(5)。

それぞれの主張には説得力があり、大変に興味深い論争になっている。

なお、8は鎌倉市荏柄天神の瓦で、同型か同範と思われる資料である(6)。「天正十八年七月豊臣秀吉参詣。社頭造営の事を沙汰す」という社伝の記録に符合し貴重な資料である(7)。

また「天正19年」という紀年銘のある平瓦も発見された。久保田氏正男氏採集の「辛卯八月日」銘瓦(1)と併せて紹介しておく。

(1)小田原城郭研究会1989「石垣山一夜城跡現況調査報告(増補版)」

(2)森田克之1984「撰津高槻城」高槻市教育委員会

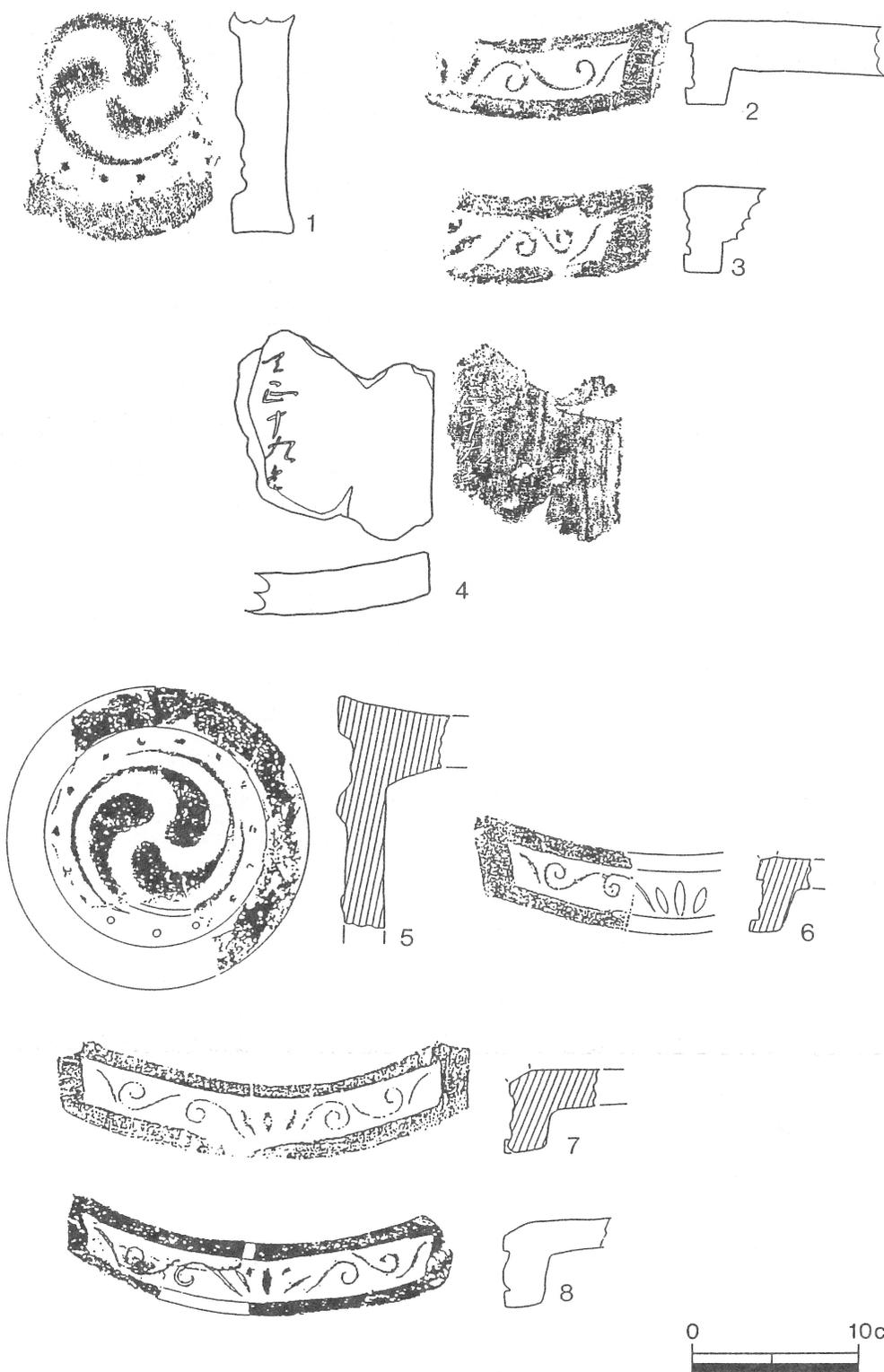
(3)田堀文範1993「史跡石垣山Ⅲ」小田原市教育委員会

(4)土山公人1992「瓦から見た中世城館」考古学ジャーナルNo.353 他

(5)加藤理文1993「久野城Ⅳ」

(6)横須賀考古学会1990「神奈川の中世瓦集成図録」横須賀考古学会研究調査報告5 大島慎一・上石統子氏のご指示による。

(7)赤星直忠1932「鎌倉荏柄天神古瓦」考古学雑誌第22巻1号



1~4 石垣山城(「石垣山Ⅲ」)・5 駿府城・6 浜松城・7 横須賀城(「久野城Ⅳ」-「織豊期城郭の瓦」-加藤理文)・8 荏柄天神社(「横須賀考古学会研究調査報告書5」横須賀考古学会1990)

## 石垣山一夜城址見学 雨天変更：箱根町立郷土資料館の見学に 東家洋之助

日頃固い話が多い考古学の先生方から一時間半の登山道で秀吉、家康にまつわる生々しい話でも聴かせて頂きたいと思い、楽しみに出掛けた。新しく開館した「生命の星・地球博物館」を見学して集合場所の入生田駅に行った。集合時間を30分延長したが、先生方6名、会員3名の計9名（他に家族3名が顔を見せたが予定変更して他に足を向けた由）であった。運が悪いのはまだ続き、私は本見学会の感想文を書くよう依頼されてしまった。

郷土資料館、土器、石器のコーナー以外は通常パスするのに今日はちょっと違った。古墳の羨道に当るロビーには13種の色の異なった3<sup>㍉</sup>×3<sup>㍉</sup>×25<sup>㍉</sup>の角柱98,000本で100日かかりで金指喜久次氏が制作された寄木細工の額が目についた。脇部屋であるが前室に当る部屋では、特展『箱根の古写真展』で「はふや前のチェアー籠」明治19年に開発された外国人向けの籠チェアーに傘をさした婦人が気のせいか、大原麗子に似て見える。「山かご勢揃い」はクモスケ籠で対象的であった。白石先生の計らいで当資料館の指導的立場に居られる金子皓彦先生の説明を受けられることになった。

### ◇テーマの「道」について

（先土器時代・縄文時代）

黒曜石の産地が近いこと、食糧の木の実などが豊富、狩場が多かったため千石原や彫刻の森のある処は7,000~12,000年前の遺跡がある。

（弥生時代）

東海地方で足踏みしていた稲作文化の伝播が、勿論海路もあったが、箱根の山を越えて相模の北西部に伝わった。



（古墳時代～中世）

箱根の山の自然の厳しさは信仰につながり、山岳信仰の対象となり信者の往来、温泉場の利用など文献による確認ができています。

（江戸時代～明治時代）

大名の参勤交代、庶民の伊勢詣りなど、東海道として栄えた。江戸防衛上、尾根道が谷間道につけ替えられたことで坂道が多くなり旅人は苦勞したが、宿屋や土産物屋ができたりして賑わった。外国人の避暑地にもなって異国文明にも接することができた。

（註）土産物の代表 —寄木細工—

静岡の浅間神社建替え工事の宮大工が居ついて始めたのが起源であり、以後畑宿より優れた細工ものができている。金子先生は寄木細工を研究された縁で1,500点ものコレクションをされている由。また近々研究成果を出版される予定だそうです。

### ◇江戸時代の箱根道の道造りについて

（模型展示）

坂上は流水による舗道の崩れを防止し、坂下は雨水が側溝に流れ易いように左側を低く傾斜をつけて工事している。また、大きな栗石の間は小石で目地造りを行っている。

### ◇旅と路銀

籠代<上>・200文(4,000円) そば1食・32文(640円) うどん・16文(320円) 甘酒・16文(320円)

わらじ・12文(240円)

#### ◇箱根の関所と町名の不思議

関所上方口千人溜から 新町⇒小田原町⇒三島町⇒芦川町⇒三島宿へ

関所江戸口千人溜から 新谷町⇒小田原宿  
小田原、三島とまぎらわしい町名を付けたりしたのは、何故か。当時の人々と旅人の心理作戦のようなものが潜んでいるようでおもしろい。

資料館には全部で16枚32ページの補助説明と学習テキストが一般的用、子供用の別々に作られ展示の要所に置いてあった。国立歴史民俗博物館のシステムに似て、より親切であると思ひ、関係者の誠意を感じた。

2時半頃、現地解散、身体の冷えを慰す酒の肴をみやげに帰途についた。

1995年3月25日

#### <施設案内>

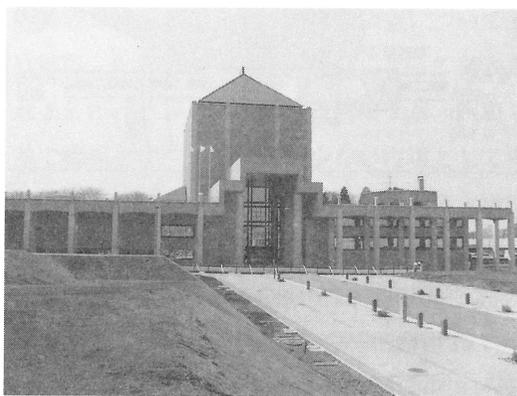
##### 横浜市歴史博物館

昭和63年の歴史博物館建設基本計画を基に、平成元年＝基本設計、平成2年度＝実施設計を経て、平成3年度に建設工事及び展示物制作に着手し、平成7年1月31日に開館しました。

博物館の建物(延床面積9,269㎡)は、地上6階・地下1階で、常設展示室・企画展示室・体験学習室・図書閲覧室・講堂・研修室などの施設を備えています。また、博物館に隣接する大塚・歳勝土遺跡およびその周辺は、現在歴史公園として整備中で、開園(平成8年度予定)後は博物館とともに一体的に活用していきます。

常設展示室は、歴史劇場・通史展示室・スタディサロン・映像コーナーで構成されています。このうち歴史劇場は、横浜の二万年にわたる歴史の流れを約15分の映像で紹介する場所です。また、原始から近現代まで時代別の6つの部屋からなる通史展示室は、「横浜に生きた人々の生

活の歴史」を基本テーマとし、いずれも①むらに生きる人々(各時代の人々の生活の様子)②人と物の流れ(流通・往来など他地域との交流の歴史)③変わる横浜の形(開発などによる生活の基盤づくりの変遷)の三つの要素から構成されています。各時代の部屋とも、実物資料を中心に模型・パネル・映像・コンピューターを多く用い、可能な限り露出展示をすることによって、入館者にわかりやすく親しみやすい展示としております。このほか、常設展示室の中央に位置するスタディサロンは、休みながら楽しく学習のできる場所で、体験学習室とともに、来館者が歴史を身近なものとして体感できるように工夫しております。また、映像コーナーでは、横浜に関する歴史や文化財などをテーマにした各種ビデオを自由に見ることができます。



所在地：横浜市都筑区中川1-18-1

交通：横浜市営地下鉄・センター北駅下車、徒歩5分

開館時間：午前9時から午後5時まで

休館日：月曜日、祝日の翌日、1月1日～1月4日及び12月28日～12月31日

観覧料：一般400円、大学生・高校生200円、中学生・小学生100円

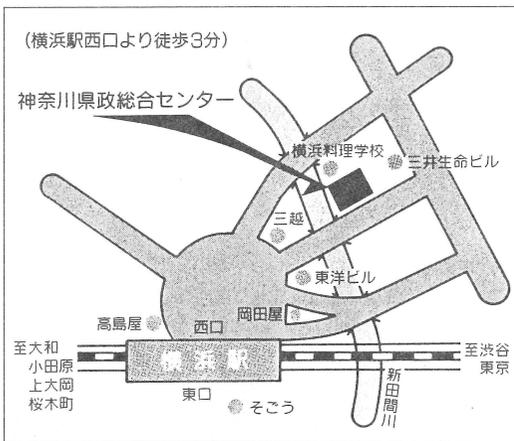
特別展・企画展の観覧料は別に定める。

(横浜市歴史博物館 曾根勇二)

## 総会のお知らせ

1995年度の総会を下記のとおり開催します。

- 日 時 1995年 6月 4日(日) 13:00～
- 場 所 神奈川県政総合センター  
(横浜市神奈川区鶴屋町2-24-2)
- 議 事 (1)1994年度事業報告  
(2)1994年度収支決算報告  
(3)1995年度事業計画案  
(4)1995年度予算案  
(5)特別講演会



## 『考古論叢 神奈河』第4集の刊行

本研究誌は神奈川県及びそれに関連するテーマの学術情報を中心に、身近にある資料や日頃思っている研究上のヒントを紹介したものも合わせて掲載しています。会員の皆様と共により充実したものに育てていきたいと考えておりますので、皆様の投稿をお待ちしています。

第4集は次のような内容で発行いたします。  
神奈川県における古墳時代の開始……遠藤秀樹  
小田原地域の古墳成立への一視点—小田原市千代仲ノ町遺跡第Ⅱ地点・千代南原遺跡第Ⅳ地点出土の土器様相から—……滝澤 亮  
相模国府城の様相—国府城内の集落の分析をとおして—……明石 新  
「階段付き地下式坑」について……小山裕之

(資料紹介) 川崎市麻生区宮添遺跡の墓壇について……碓井三子

## 1994年度役員会記録

- 第1回 1994年 5月 2日(月)県政総合センター  
議題 ○1994年度総会準備 他
- 第2回 1994年 5月21日(土)県立埋文センター  
議題 ○1994年度総会準備  
○1993年度決算会計監査について 他
- 第3回 1994年 7月26日(火)県政総合センター  
議題 ○第18回遺跡調査・研究発表会の準備  
○「考古論叢神奈河4」、「考古かながわ7」の編集について 他
- 第4回 1994年 9月13日(火)県立埋文センター  
議題 ○第18回遺跡調査・研究発表会の準備  
○考古学講座について 他
- 第5回 1995年 1月30日(月)県政総合センター  
議題 ○考古学講座について  
○日本考古学協会の協力について 他
- 第6回 1995年 3月20日(月)県政総合センター  
議題 ○1995年度総会準備  
○役員改選について  
○日本考古学協会誌のポスターセッションについて 他

<訃報> 会員の [REDACTED] さんがお亡くなりになられました。ご冥福をお祈り申し上げます。

### 考古かながわ 第8号

発行 神奈川県考古学会  
発行日 1995年 3月31日  
編集者 伊藤 郭、川口徳治朗、小宮恒雄、後藤喜八郎、塚田順正  
事務局 東海大学文学部考古学研究室内  
〒259-12 平塚市北金目1117  
郵便振替 00240-9-71208  
神奈川県考古学会  
印刷所 東邦印刷株式会社